

# ワドワ インド大使講演会

## 資料

### 目次

1. 大使プロフィール
2. マンモハン・シン首相閣下講演
3. 在日大阪・神戸総領事ヴィカス・スワループ「私の日本考」
4. 日印協会草創期

2013年10月1日

会場：イタリア軒 3F サンマルコ

## 1. インド大使プロフィール

### Deepa Gopalan Wadhwa Ambassador

### ディーパ・ゴパラン・ワドワ大使

ディーパ・ゴパラン・ワドワ夫人は2012年8月8日、駐日インド大使としての任務を遂行するため東京に到着しました。

ディーパ・ゴパラン・ワドワ夫人は1979年インド外務省に入省しました。北京には2回の駐在経験があり（1983年－1987年と1992年－1994年）、マンダリン語を話します。また、80年代後半にはインド外務省のパキスタン・デスクに勤務していました。ワドワ夫人は多国籍機関における豊富な経験があり、国連機関では人権、非武装化、環境・社会問題を担当しました。また2001年には、国際労働機関（ILO）傘下の児童労働撲滅計画（IPEC）のニューデリー事務所長を務めました。

ワドワ夫人は香港、ジュネーブ、ハーグにも駐在しました。インド外務省国連経済社会局局長を務めた後、駐スウェーデン・ラトビアインド大使に任命されました。来日前は駐カタル国インド大使（2009年3月－2012年6月）を務めました。

ディーパ・ゴパラン夫人は、インド外務省に在籍し現在駐タイ王国インド大使を務めるアニル・ワドワ氏と結婚しており、二人の息子がいます。

## 2. マンモハン・シン首相閣下講演

2013年5月28日(火)に行われたシン首相講演会内容

私は、インドの友人たちで満たされたこの会場に喜んで参りました。特に、森さんがご列席いただいたことは有難く、光栄に存じます。

森さんは、偉大な個人的友人であることにとどまりません。インドの偉大な友人でもあります。森さんは総理大臣として、両国及び両国民の古くからの関係に新たな局面を開いて下さいました。森さんに対しパドマ・ブーシャン勲章を差し上げたのもそれが理由です。

友人の皆様

アジアの興隆は、1世紀以上前にこの「日出国」から始まりました。以来、日本は我々に前に進む道を示してくれました。インドと日本は、興隆するアジアというヴィジョンを共有します。ここ10年以来、両国は共通の価値観と利益を基礎に新たな関係を確立しました。

日本の近代知的産業国家としての興隆は、インドの偉大な指導者たちにとってインスピレーションの源となりました。哲学者スワミ・ヴィヴェカナンド、詩人ラビンドラナート・タゴール、技術者ヴィシュベシワラリア、愛国者スバシュ・チャンドラ・ボース、近代インドの建設者ジャワハルラル・ネルー等々、全ての人々が、19世紀から20世紀における日本の偉大な成果に触発されました。

最近では、インドの漸進的ながら継続する経済的興隆は、両国がともに協力し協働する新たな機会を作り出しました。インドは、日本の技術と投資を必要としております。他方、インドも、日本の全般的な繁栄と成長のために必要な成長とグローバリゼーションの機会を増やしつつあります。

友人の皆様

私は、安倍晋三総理から本年最初の客として東京に来るようご招待いただいたことを、深く名誉と考えました。不幸なことに、インド国会との関係で、その時点で訪日することはできませんでした。桜の季節も逃しましたが、我々の偉大な未来を意味する春の季節に訪日することができたことを喜んでおります。私はまた、両国民の友情とくに両国の企

業間のパートナーシップと国防・戦略コミュニティー間の協力が、安倍総理のリーダーシップのもとで花開くものと確信します。

この機会に、安倍総理が2007年8月に行ったインスピレーション豊かでヴィジョンのある演説を想起したいと思います。安倍総理は、「二つの海—インド洋と太平洋—の交わり」と題し、両国関係の枠組みを定義づけました。安倍総理と私は、協力して、戦略的パートナーシップを強化し、経済関係に新たなモメンタムを与え、共通の地域的および地球的規模の利益を深めて参ります。

皆様、

インド洋—太平洋地域は、人類史上これまでみなかったような規模とスピードで、深い社会的経済的変化を目のあたりにしています。この地域は、自由、機会および繁栄の面で、この半世紀の間、前代未聞の興隆を経験しました。

同時に、この地域は、多くの挑戦、未解決ないし未決着の問題に直面しています。相互依存の増大にもかかわらず、歴史に関わる相違は残り、繁栄も各国内および各国間の格差をなくしておりません。安定と安全への脅威は続いております。

このような変化と変遷においてこそ、我々が今世紀のアジアにとっての新たな進路を開く偉大な機会となるわけです。世界経済の重心と成長のかじ取りはこの地域に移行しつつありますので、この地域の未来は、今世紀における世界の未来の輪郭を規定するものとなりましょう。

インドと日本は、この地域における主要国です。共通に持つ宗教的、文化的、精神的遺産は、平和、共存および多様性を具現するものであります。平和、繁栄および協力の雰囲気醸成し安全と繁栄の永続する基礎をきづくことは、我々の責任です。私は、この点で3つの分野での協力を提案したいと思います。

第1は、協議と協力の習慣を発展させ、相違点をマネージするための共通の原則を進展させ、一致点を強化し、共通の挑戦に立ち向かえるようにすることを可能にするような、地域機構やフォーラムを強化すべきです。

第2は、より広く深い地域経済統合を促進し、地域的連結性を強化すべきです。これによって、地域全体にわたるバランスのとれた広範な経済発展が促進され、さらによりバランスのとれた地域的機構への貢献がなされるでしょう。

第3は、インド洋および太平洋にわたる地域の海洋安全保障は、地域的および全地球的繁栄のために本質的な重要性をもちます。従って、我々は、国際法に従った航行と合法的商業活動の自由の原則を擁護し、海洋問題を平和的に解決し、海の持つ可能性を利用するためにより意識的に協力し、また海賊のような海に関する共通の挑戦に対処すべきです。

友人の皆様

インドがこの地域に深く関与するのは、このようなヴィジョンによるからです。我々のルック・イースト政策（東方政策）は経済面を強調して始められましたが、今やその内容はより戦略的なものとなりました。我々の政治的関係は、全ての国およびアセアンのような国家グループとの間で密接になりました。我々は、貿易および経済協定のネットワークを発展させました。連結性を強調し、および経済協定のネットワークを発展させました。連結性を強調し、東アジアサミットやアセアン地域フォーラムのような地域的協力の要となる機構に積極的に参加しております。

インドの日本との関係は、ルック・イースト政策の中心です。日本は、繁栄に向けたアジアの興隆にインスピレーションを与え、アジアの未来と一体になっています。世界は、日本が成長のモメンタムを回復することに大きく依存しております。日本の企業、技術、革新への指導力およびアジアのルネッサンスのための牽引車となる能力は、ともに死活的に重要です。

インドの日本との関係は相互の経済にとって重要であるのみならず、インド洋と太平洋にまたがる広大なアジア地域の安定と繁栄を求める上で、インドは日本を当然のかつ必須不可欠なパートナーと見ております。

日印関係の力は、精神的、文化的、文明的な近さと民主主義、平和および自由への共通のコミットメントから来るものです。両国は、世界観を益々共有し、お互いの繁栄に大きく依存しております。海洋の安全保障は共通の利益であり、エネルギー安全保障については同じような挑戦に直面しております。両国の経済には強いシナジーがあり、繁栄のため

には、オープンルールを基礎とした国際貿易システムが必要です。国連安全保障理事会のための新たな仕組みについても、ともにこれを希求しております。

ここ数年、両国の政治安全保障には目立った進展がありました。日本は、我々が持っている2プラス2、すなわち外務及び防衛省間の対話の唯一のパートナーです。我々は、日本の海上自衛隊と二国間の演習も始めました。

日本は、長い間、インドの経済発展努力にとって重要な里程標の一部でした。マルチ・スズキの協力は、インドにおいて産業発展の波に火をつけました。デリー・メトロプロジェクトは、公共運輸部門で同様の革命的刺激を与えました。両国間の二つの旗艦的プロジェクト、すなわち貨物専用線西回廊とデリー・ムンバイ産業大動脈は、その広がりおよび規模において比肩すべきものはありません。両国は、チェンナイ・ベンガルール間の産業回廊のような新しいプロジェクトを探求中です。両国間の包括的経済連携協定は2011年に開始されましたが、昨年にはレアアース分野での協力合意に署名することができました。

皆様

以上のことは、両国がすでに豊かな関係にあることを意味しております。しかしながら、我々は、このパートナーシップが体現するヴィジョンにふさわしい、より高い目的を設定しております。従って、前に進むためには、共通の利害のある地域と問題について政治対話を強化し、戦略的協議を拡大しなければなりません。防衛・安全保障対話、軍事的演習および国防技術の協力は、拡大しなければなりません。グローバル及び地域的フォーラムにおいて、両国は協議し協力しなければなりません。

両国の関係は、また、貿易の拡大と投資関係に基礎をおかねばなりません。本日これより前、経団連の会合で経済界の指導者の皆様に申し上げた通り、インドの経済成長は過去10年間に経験した年率8%プラスの成長を間もなく回復することは、我々の約束であり達成を確信しております。

この確信は、インドのファンダメンタルズの強さ、旺盛な企業家精神、最近インドが行った政策面の改革とメガプロジェクト実施の加速から由来します。インドの大きなマーケットへの日本の一層の投資は、両国の経済及び戦略的な利益です。このような考えは、ハイテク面の交流、クリーン・エネルギー、エネルギー安全保障および技術の発展をも導くものです。

安倍総理と私は、(首脳会談では)豊かな話題について議論するでしょう。我々は協力して、両国関係を特別深く多様にした年次首脳会議や多くのイニシアティブを開始しました。我々は、両国、この地域そして世界のために両国関係の高まるモメンタムを維持するのみならず、新たな内容を加えそれを実行するでしょう。

友人の皆様

終わりに当たり、私が最初にこの美しい国を訪問した1971年以来、日本は私の心に深く刻まれていることを申し上げたいと思います。両国関係が進展し繁栄することは私の夢であり、インドの首相としてこの9年間努力してきた目標でもあります。今日、日印関係が堅固な関係に転換したことに励まされます。皆様の御努力とイニシアティブこそ、引き続き両国関係にとって大きな力の源泉になることを信じてやみません。

有難うございました。

仮訳文責日印協会理事長平林博

((公財)日印協会発行 月刊インド Vol. 110, No. 5 June, 2013 1. マンモハン・シン・インド首相来日 より)

### 3. 在日大阪・神戸総領事ヴィカス・スワループ「私の日本考」

Vikas Swarup ヴィカス・スワループ

アカデミー賞8部門の受賞作品「スラムドッグ・ミリオネア」の原作となった「Q & A」の著者としても知られるヴィカス・スワループ在大阪・神戸インド総領事は、2009年8月に赴任されて以来約4年が経過、任期を終えて8月ニューデリーの本省に帰任された。

生年月日：1961年6月23日

出生地：インド、アラハバード

学歴：アラハバード大学を首席で卒業

経歴：1986年にインド外務省入省後、駐トルコインド大使館、駐米インド大使館、駐エチオピアインド大使館や、在外公館等に多く勤務し、2009年駐南アフリカインド高等弁務官事務所高等弁務次官を経て、在大阪・神戸インド総領事に着任。

趣味：読書、音楽鑑賞、クリケット、テニス、卓球

著作：Q & A (2005年) (邦訳『ぼくと1ルピーの神様』2006年、ランダムハウス講談社)

SIX SUSPECTS (2008年) (邦訳『6人の容疑者』上・下2010年、武田ランダムハウスジャパン)

THE ACCIDENTAL APPRENTICE (2013年1月)

#### Reflections on Japan—私の日本考抄訳

妻と私は、トルコ、米国、英国、エチオピア、南アフリカに勤務した。2009年に日本にやって来た時には、日本は科学と革新にあふれたワンダーランド、明るい光・印象的なスカイライン・新幹線・桜・富士山のイメージであった。200年前の木造建築、千年以上続く祭りの数々、暑くて湿気の強い夏、それに地球上でもっとも驚愕すべき日本人、これらは赴任前は想像できなかった。

最初のカルチャーショックは、英語を話しながらない日本人であり、マスクをする日本人であった。同じフライトで来たインド人は、「日本にはなぜこんなに医者が多いのか」と聞いてきた。

これまでの日本滞在は驚きの連続であったが、次第に慣れ、今では日本は自分の家になった。外交官は遊牧民みたいなものであり、私も間もなく他に転勤する運命だ。

日本はユニークだ。多様性、(歴史の)古さ、複雑さ、更に国民の同質性と独特の文化。200年の鎖国が日本独特のユニークな文化をもたらしたのかもしれない。

社会は文化的価値で決まると考えるが、日本は強い価値観と倫理観のあるまとまりのよい社会だ。



ある日本人学者は、欧米人はデジタルだが日本人はアナログだと喝破した。欧米人は「個」を重視し他人との関係で自分を規定しない。日本人は、アナログ時計の文字盤のように、大きなシステムの中で動き、他の人との関係で自己の価値を見出す。

南アフリカでは、我々の自宅には8つの鍵がかかり、二重のグリルの柵があり、探知機と警報機に囲まれて住んでいた。日本では、家に鍵をかけないで外出する。女性は深夜でも自転車に乗っている。母親は、自動車の鍵もかけずに赤ん坊を残して買い物する(訳者注: 感心したことではない!)。小学生は一人でも登校下校し、信号が緑になるのを待って道を渡る。安全さは至る所にある。

しかし、真に驚くのは、財布を置き忘れても戻ってくることだ。日本の友人が、私はなぜ日本で小説を書かないのかと聞く。私の小説では、現金の入ったブリーフケースやダイヤモンドが他の手に渡ったりすることが筋書きになる。しかし、日本では意図的に財布を落としても、誰かが拾って後を追いかけて渡してくれる。これでは小説にならないではないか! 妻が雲仙で携帯電話を落とした。探したが見つからなかった。2時間後、警官がホテルにやってきて、観光客が交番に届けてくれた携帯電話を渡してくれた。

従って、日本で最も驚くのは日本人そのものである。私が人生で知り合った最もナイスな人々であり、親切さは心に深く刻まれている。道を聞いても、日本人はわざわざ自分のスマートフォンで行き先を探し、目的地まで案内してくれる。

「和」は重要だ。(中略)交通渋滞でもクラクションを鳴らさない。壁に落書きもしない(訳者注: そうでもない者がいる)。道にごみを落とさない。お互いを尊重し、邪魔をしない。電車は列を作って待ち、定時に到着する。約束の時間は守る。他では、「時間厳守」は「時間厳守をしない人間を待つ術」と定義できるが、日本では時間厳守は神聖な約束だ。

人々は環境を大切にす。日本が偉大な理由の一つだ。

日本人は、我々が心地よく過ごせるために、最善の努力をする。カスタマーサービスが秀逸だ。日本はこまやかな心遣いの国だ。刺身の切り方、お茶の出し方、いけばな、包装の仕方(包装そのものが贈り物だ)などなど。

大阪に着いたときに最初にやってきたのが警察官であった。ほとんどの国では、警察官が自宅にくるときは手錠をかけに来る時だ。大阪では、警察官は挨拶代りにと、ブドウを持って来た。

日本人が伝統やセレモニーを重視することも好きだ。季節によって違った伝統やセレモニーがある。花見、海水浴、月見、豆まき。男の子と女の子の祝いの日。老人の日もある。祭りに至っては、札幌の雪まつりから京都の祇園祭、大阪の天神祭りなど挙げればきりが無い。

伝統文化と同様、宗教も生活と一体になっている。インドのように。町のどこでも寺や神社がある。京都では1,600の寺と400の神社があるが、ここは息がつけるオアシスだ。どこの寺社

に行っても誰かがお参りしている。忙しい生活を送っているはずだが、精神を養う時間を見出すのだ。日本の美は宗教から由来する。インドでは「真理は美」だが、日本では「美が真理」だ。

日本は自然が美しいが人工美もある。世界最長の明石大橋、最高の電波塔スカイツリー、最速のスパコン「京」などなど。

自然の美は比類がない。光あふれる山々と静かな山里。バラ色に沈む太陽と富士山にたなびく雲、哲学の道の桜並木と海に沈む宮島の鳥居、山に囲まれた露天風呂。日本の美は、人間の丈に合わせている。高松の栗林公園、松江の足立庭園と由志園、竜安寺・大徳寺・天竜寺・南禅寺・東福寺の石庭。

日本の自然美は内的な美に深化し完成する。わび・さび、もののあわれ、「間」等だ。これらが日本の建築、庭園、音楽、いけばな、和歌、書、茶の湯、さらには現代の生活品や住居に反映している。

日本人は、全てに「美の瞬間」を見出そうとする。ささやかな弁当も一種の芸術だ。バーガー・キングの味の無い包装と比べると分かる。日本食は、特に審美的だ。単なる栄養のためではない。食事は、まず「目で食する」ことから始まる。日本食は、ミニマリストの伝統があり、小さなものでも大きな意味がある。

東京は世界で一番レストランが多いが、一人あたりの自動販売機数もそうだ。卵、花、食物、タバコ、酒、アイスクリーム、生鮮野菜、売っているものはきりが無い。なぜなら、技術が生活の不可分の一体となっているからだ。世界最古の弾丸列車、テレビのように二重になる携帯電話、ウォッシュレット。耐震・免震のビル。ロボット式の駐車場。バーやレストランのタッチスクリーンのメニュー。空港でのペーパーレス・チェックイン。ロボット式の電気掃除機。真四角のスイカ！

日本の都市は、最も組織化されており、最もクリーンだ。公共交通も発達している。早くて便利で時間に正確だ。郵便と宅配便は、もうひとつのワンダーだ。

日本では富を誇示せず、人の財産も聞かない。それは日本人の優先事項ではないからだ。インドでは、99のサイクルがあるという。99のものを持つと、3ケタにするためにもう一つを望む。999になると4ケタにするためにもう一つを望む。日本人はこのネズミ・レースから解放されており、違った価値観で生きている。

日本では、名誉、忠誠、分かち合い、犠牲といった観念が生きている。2011年の東日本大震災の際、世界中の人が日本人のこの特性を見た。地震と大津波を前にして沈着冷静、相互扶助。パニックもヒステリーもなかった。不平不満も戦いもなかった。他では通常みられる盗みもなかった。

日本に来た者はだれもが日本を愛するようになる。当然だ。帰国する者は、日本人のそのような素晴らしさを胸に抱いて帰る。

日本から学ぶものは多い。寿司やビデオゲームだけではない。伝統を大事にしながら近代を生きる。義務を威厳と名誉を持って果たす。日本は21世紀のリーダーになる資質を示してくれる。

我々が帰国して失うものは多い。しかし中でも心に残るのは、平和(のセンス)だ。この忙しい世の中で完全な静謐を経験することは稀である。我々は、それを日本で経験した。

(訳：日印協会理事長平林博)

((公財)日印協会発行 2013年7月現代インド・フォーラム 2013年 夏季号 No.18 より)

#### 4. 日印協会草創期

日印協会は 1903 年（明治 36 年）に長岡護美子爵（ながおかもりよし・初代日印協会会頭）と大隈重信侯爵、澁澤栄一子爵、という日本の近代化を担った方々によって設立されました。澁澤氏は日本資本主義の父と呼ばれ、設立・育成に関わった企業は約 500 にのぼり、教育機関・社会公共事業は約 600 にのぼるといわれ、企業の利益と公益の調和を求めた実業家でした。また財閥を作らなかったことでも知られています。

大隈重信氏は、現在の早稲田大学を創立、2 度にわたる内閣総理大臣、数次の外務大臣を務めました。明治開国によって、綿製品が着物を着た庶民のもとにたくさんやってくると、買い求めたお金がすべて国外に流れてしまう。アジアの近代化にとって、国運に関わることでした。紡績の工場を建てても、安定した綿花の輸入は必須の事。当時、綿花の輸入国の中国は列強が暗躍していました。

そんな時、インド人 J・N・タタ氏は澁澤氏に綿花の安定供給を約束しました。タタ氏は澁澤氏に言いました。「元来、インドは紡績事業においては日本と競争の地位に立たねばならぬような訳であるけれども、インド綿の産出はインドばかりでしつくすことはできない。もし日本で大いに紡績事業を進めるならば自分は綿花を十分に供給する、紡績業の方から競争はあろうけれどもそれが為に日本に綿の原料を送らないで兵糧攻めにするというような狭い心は決してあっていない。両方お互いに助け合って進歩していったならば、この日印紡績の前途は綿花ばかりでなく、種々の点に於いて大いに有望であろう。」

この言葉は、日印協会会報の第一号(1909 年)に澁澤氏が寄稿した文です。それは 36 年ほど遡って過去のことを書いたものです。日印協会会報の第一号が協会創立した翌年からはじまった日露戦争の影響で 6 年後に会報第一号が出されました。その冒頭で大隈氏は次のように述べています。「日本が支那及び印度から受けた文明の恩恵は非常なものです。物質上にも精神上にも、今日吾々が欧米の文明より受けつゝある利益に譲らざる大なる利益を日本に与えたのである。殊に印度は宗教や哲学や文学やの方面即ち精神上的の方面に、我国人の受けたる思想は甚だ大なるもので、天竺即ち印度と云えば昔の日本人は直ぐに極楽即ち天国と居て居た程である。」

澁澤氏は、大隈氏に日本には原料として、綿花と砂糖が必要だと提言しました。大隈氏は外務省の役人を一人インドに派遣しました。民間人 2 人も加わり、現地調査が始まりました。インドからの綿花供給は英国系の会社が配船を含め独占していましたが、澁澤氏らの努力で紡績業の組合ができ、日本郵船がボンベイとの航路を開き、タタ氏はインド側の窓口となりました。そこから日印の経済交流は飛躍的に拡大していきました。政治面からの大隈重信の役割も大きく、氏は日印協会の二代目会頭になっています。澁澤栄一氏は三代目会頭となります。タタと

言えばインドを代表する財閥として知られています。最近、ナノという世界格安の車（20 万円前後）を開発し、また一方世界の高級車メーカー ジャガーを買収して日本でも知られるようになりました。

R・D・タタが1918年、家族を連れて来日(11回目)。歓迎の宴で話をしました。「大隈・渋沢両閣下こそ日印貿易の端緒を作られたのである。回顧すれば28年前貴国より3名の視察員をインドに派遣せられたが、当時32俵の綿花を試みに日本に送った。今日においては1年に200万俵に近い数に上がっていることは、誠に感慨に堪えない次第である。」その席でタタ氏が提案した日本をもっと知るための商品館は、日印協会が外務省から委託され当時の産業・商業の中心地カルカッタに日本商品館という形で実現されました。その後、綿紡績業は関連産業と共に日本の主要な産業となりますが、その始まりは日印の交流にあったといえます。

ミティラー美術館 館長 長谷川時夫

#### ◆インドの情報ホームページ

在日本インド大使館

<http://www.indembassy-tokyo.gov.in/home.html#&panel1-3>

在インド日本国大使館

<http://www.in.emb-japan.go.jp/index-j.html>

公益財団法人日印協会

<http://www.japan-india.com/>

NPO 法人日印交流を盛り上げる会

<http://www.mithila-museum.com/spijcr/index.html>

ミティラー美術館

<http://www.mithila-museum.com/>

ナマステ・インディア

<http://www.indofestival.com/>